
なりそこないのジャバウォック

ソブエ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なりそこないのジャバウォック

【Nコード】

N4992T

【作者名】

ソブエ

【あらすじ】

魔力研究の第一人者である父を持ち、自身も並外れた魔力を持つ少年、スキピオ・マーザグース。

16歳で国家資格である高位魔術師の免許を持つスキピオであるが、所属する機関では下っぱエージェント。スキピオの所属するその民間武装機関——通称ミリタリーサービスに、国家指定聖域警備の仕事が舞い込んだ。機関の任命により相手であるノイ・ピーコックと共に警備にあたるスキピオだったが、

そこに”竜殺し”と呼ばれる謎のハンターが現れる。

魔物の中でも最も強く、美しく、気高いとされる竜。
スキピオの前に現れた竜殺しの男。

さまざまな術を可能とする不可視の力、魔力。

そして聖域とは――。

別れの支度

——この神殿の床は、いつだってひどく冷たい。

ざらざらとした壁の感触。

崩れかけの柱。

埃っぽく乾いた空気。

そのくせ、至る場所に張り巡らされた水路には、あいも変わらずしらじらしいほど清らかな水が流れている。

靴越しにもわかる、ごつごつとした、硬く冷え切った石畳の感触に思わず眉をひそめて、青年は神殿の回廊を進む足を止めた。

ここを訪れるのは、数年ぶりのことだった。

この神殿は、古い魔法で人目から隠された結界中の、水の街の中にある。

数世紀昔には至る場所に巡らせられた水路に舟がとおり、水路の周りには市場が開かれ、魔法で栄えた大都市だったらしい。

今は生き物の気配のない、美しくも孤独な街だ。

当時より水位が上がっているらしく、街の路はどこかしこも浅瀬程度の深さの浸水が起こっていた。街の所々に浮いているゴンドラを使って移動することも出来る深さだが、青年の通る道は一段高い通りなので、足元の水は水たまり程度の深さである。

光を映して青く澄み切った水はただ美しかったが、清らか過ぎて生き物の住みつける環境ではない。

時間の止まったこの場所で、いつだって空は青く晴れ渡っている。

空の美しい青色を映して水面は輝き、街はそれ自体が特別な神域となっていた。永劫を留めた、滅びかけの街。

神秘的なほどに美しい永遠の廃墟に無性に腹が立って、青年は少し、いしだたみを踏みしめるつま先に力を込めた。

彼はこの街が嫌いだ。

生き物を拒絶するような清浄さも、栄光などという言葉からは程遠い永遠も、そのくせ全ての時を留めておけるわけではない節理も、なにもかも憎たらくてたまらない。

それでも青年がこうして街を訪れるのは、この永遠の中でひとり、緩やかな時を生きているひとが、いるからだ。

神殿を深くまで進んだ、この街の中でもっとも清らかな場所。

その場所に彼女がいる。

青年は再び歩みを進めて、回廊を進んだ。

神殿のもっとも深く、祈りの間にその人はいた。

光源のないそこでは 崩壊した天井からさし込む陽の光が、スポットライトのように光の架け橋を作って室内を照らしている。水は膝のあたりまで浸水していて、水底には硝子の薔薇が咲き乱れていた。

静寂の中、冷たい石の上に少女はいた。

ひとときわ高い——おそらく崩れかけた祭壇だろう——石段に素足で立ち、青年に背を向けて空を見上げている。青年はその姿を見つめて、いつ見てもどこか少年のような後ろ姿だと思った。

部屋を見渡すと、以前訪れた頃には確かにあった少女のベッドがなくなっていた。壊して捨てたか、朽ちて失くしたか、何れにせよ、破片のひとつ、部品のひとつも残ってはいない。

青年は崩れた天井の隙間から見える空をじっと見上げている少女の背を、食い入るように見つめる。

永劫に時を止めたこの街で、唯一少女だけが緩やかな時の流れの中にいる。

この小さな背中だけが、ただひとつ永遠を得られなかったのだ。

「——君も大概人がいい。こんなところに来たって、いいことなんてありはしないよ」

振り返らないまま、彼女は含み笑いの声でそう言った。

少女らしい甘さを含まない彼女の声は、むしろ凜として美しく、理性と英知の音で柔らかく響く。

青年はようやくここに至って笑みを浮かべて、少女の背中に声をかけた。

「…ベッドはなくなったのか」

「ああ、うん、壊れてしまった。もう随分前に眠らなくなっていたから、ちょうどいいと言えばちょうどよかったかな」

「足が折れたからね、流してしまった。舟のようにね」くすくすとしばらく忍び笑いで笑って、それから彼女はようやく、敬虔な信者のように祭壇を見上げる青年を振り向く。

少女の金色の髪が陽光をはじいて、光そのものみたいに輝いている。

「ベアトリーチェ…」

青年の口から、どこか恍惚とした声がこぼれおちた。

青年にとって少女の——ベアトリーチェの名は、それだけでこの神域よりも絶対の唯一で、彼はその名を呼ぶだけで苦しいほどの愛を

覚えるのだ。

振り返った彼女の姿は青年の記憶の姿と変わらずに中性的で美しく、彼女の長いまつげがふわりとゆれたのを見て、青年は少女が微笑んだのを察した。長らく人と接することがなかったためだろう。少女の頬笑みは少しぎこちない。

「…アグニ」

ベアトリーチェは、永劫に変わることなく美しい。

青年——アグニは、そのことが耐えがたく悲しかった。そして、同じくらいに幸せだった。

この想いこそが己の罪悪だと感じていた。

「そんな顔をするものではないよ、泣く子をあやすのは得意だけだよね」

眉根を寄せた彼の表情を指して、ベアトリーチェはおかしそうに肩を揺らして笑う。

ひどい顔をしている自覚は少なからずあったので、アグニは思わず、自分の口元を掌で覆って呟いた。

「からかうな……」

思いの外不貞腐れているアグニの声に少女はからからと陽気に笑って、至極楽しげに琥珀色の目を細めた。

「君は素直ないい子だね、アグニ」

「いつまでも、子供のように扱うのはやめろ」

「君は子供さ。いつまでも私を恋しがって、後をくっついて歩きたがるんだからね」

上機嫌にいうベアトリーチェの顔を見返すことが出来ずに、アグニは恨めしく少女から顔を背ける。

そう拗ねないでくれ、と囁く少女の声が本当に幼子をあやす母のようで、アグニは溜息でも付きたくなった。

「お前はいつも変わらない。…ベアトリーチェ、俺はそれが悲しくて、嬉しい」

「そうでもないよ。…そうはいられない、かな」

ふいに、額にかかった髪をやさしくかきあげられて、アグニはハツと顔を上げた。

祭壇の上にしゃがんだベアトリーチェの小さな手が、アグニの頭を撫でる。

「私の可愛いアグニ。…残り少ない、人でいられる時間で君と再び待見えたのは僥倖だった。

人の命のまま、長い命を緩やかに終えられたらと思っていたけれど、もはやそれもかなわない」

ベアトリーチェの手のひらがひどく冷たくて、アグニはぞっとするような寒気を覚えた。

少女は確かに長すぎる時を孤独に生きる業を負ったが、それでも確かに人だった。

なのに——何故こんなにも、冷たい。

「ベアト、リーチェ」

「私が人でいられるときは、もう随分短いだろうから」

伸ばされた腕の衣服の袖から、少女の腕が見えた。

ちらほらと鱗の生え始めたそれはもはや人間の腕と呼ぶことは出来ず、そのきらきらしい光沢は何故か彼女に良く似合っていた。

彼女はもうすぐ竜になる。

人の皮を捨て、魂の形をわずかに残して——ベアトリーチェは、人ではないものになる。

緩やかな長い命なんてものでなく、本物の永劫に落ちる。

「――次の別れが、永遠だ。アグニ」

別れの支度

01 スキピオ・マーザグース

魔力が高かったって、別に良いことばかりじゃない。

無駄に魔力のみなざる日はそれだけからだの内側から圧迫されるみたいに苦しいし、それが満月の日だったには、自分の魔力で破裂するんじゃないかってくらいにしんどいんだからたまらない。

そもそも戦うことは好きではなく、強くなることにも目立つことに別にもこだわりはない。

高位魔術師になってひと財産築いてやろうとか考えてる訳じゃなかった。でも、ただ単に、日常的に魔術を使える——つまり満ちる一方である魔力を発散できる立場ってものが、俺には必要だった。魔術あるいは魔法、それに類する術の使用は国家によって定められた免許を持つ者にしか認められていない。だから俺は、それを取った。

つまり、ただの手段なのだ。

スキピオ・マーザグースは、民間武装機関に所属する高位魔術師だ。数えて16歳になったばかりの少年で、魔術師の資格を取ったのは記録最年少の10歳。当時はめちゃくちゃ話題になって、新聞にまで載ったりした。

ちなみに国家資格を有する魔術師ではあるが、機関のなかでは下っぱエージェントである。

スキピオ自身に偉くなりたいとか、もっと良い給料が欲しいとか、そういった類の欲がないのだ。なにしろそういうことを考える年齢でもない。もともとの性分もあつて、スキピオは今のところ現場を離れるつもりは更々なかった。

『仕度なさい、スキピオ。朝ですよ忌々しい』

「…まだ眠い…」

『眠気がなんですか、私なんて日光で吐き気がします。いいから起きなさい』

まるで母親のような口を利く耳元の声に、ベッドのなかで蹲つていたスキピオは顔をしかめて薄目だけ開いた。

見れば、大鷲の姿をした悪魔がばさばさと翼を羽ばたかせて怒っている。スキピオと契約を交わした悪魔、デルフィノだ。朝を好まず、夜闇で生きる。

スキピオに母はいないが、研究者の父はいる。二人暮らしのアパート住まいなのだが、去年、父が研究所の所長に就任してからはほとんど一人暮らし状態だった。仕事に忙殺されて、父はアパートに帰つてこられないのだ。かわりにというかなんというか、スキピオには何匹か契約している悪魔がいるので、今はそれらが同居人みたいなものである。

眠りから浮上したスキピオに、これを好機と読んだらしいデルフィノが尚もやかましく声をたてる。大きく羽ばたいた翼が体に当たつて、スキピオはうわつと跳ね起きた。

『さあ早く！』

「イタツ！起きる、起きるって！耳元で叫ぶなよ！」

『良いですか。貴方が起きたら私は還りますから、夜まで喚ぶんじ

やありませんよ」

「わかったから翼で叩くなつてば！」

『結構。わかったのならさっさと起きて仕度をなさい。貴方が家を出たら、私は還りますからね。日中喚ぶなら別の奴にするんですよ』

「お前は俺の母さんか？」

『貴方がいくつのときからの契約だと思っっているんですか。いいからさっさとなさい、ピーコックの小坊主が来ますよ』

スキピオは魔術師である——　つまるところ戦闘においては後方支援型であるので、当然前線戦闘を行える相棒がいる。

名前はノイ・ジャーハ・ルツ・ピーコック。デルフィノのいうところの、”ピーコックの小坊主”だ。小坊主といっても彼は19歳だから、スキピオよりは3つも年嵩である。

自信家で高慢で潔癖で性格は極めて扱いづらいタイプだが、恐ろしく剣の腕が立つ。スベックを付け加えるならピーコック伯爵家の嫡男で、とんでもない美丈夫。無論のことらしくモテルのだが、本人はあまりひとを寄せ付けたがらないので、アプローチをかけて泣き目を見る女性には後を立たない。

この気難しい相棒、スキピオに対しては割合甘い。

懐に入れた人間に対してはそこそこの譲歩が利くというか気を許すというかなんというか、なんだか猫科の猛獣みたいな男なのだ。

しかもスキピオに関しては親友だか悪友だかという認識をしてくれているらしく、仕事のある日は自前の単車でスキピオのアパートまで迎えに来てサイドカーにのせて出勤してくれるという厚待遇ぶり。もう1年、友達兼相棒をやってるが、かなり上手いこと付き合っていると言えるだろう。

「もうそんな時間？やばっ」

とはいえ、待ち合わせた時間に遅れれば機嫌を損ねるので、スキピオはデルフィノの言葉に慌ててベッドを抜け出した。

くしゃくしゃになった髪に適当にブラシを通して、手早く着替える。ノイは外で朝食を済ませたがるから、スキピオも朝食は外で構わない。

歯磨きだけ几帳面に5分こなして、スキピオは窓辺に留まっているデルフィノを振り返った。

「どう？」

『襟が曲がっています』

「ん」

『…まあいいでしょう。では、また日の沈む頃に』

器用に鼻をならして、大鷲の姿をした悪魔は大きく一度羽を広げたかと思うと煙のようにかき消えた。ぶわり、と大きな魔力のかたまりが霧散するのを肌感じて、スキピオは思わず眉をひそめる。

——今日はまた、妙に魔力が満ちている。

早く仕事に出て魔力を発散してしまいたいと思いながら、スキピオはアパートを後にした。

02 相棒

スキピオの住むあまり上等とはいえないアパートの門を出て、ひとつ角を曲がったところに古い魔導書専門店がある。

最新の魔導書こそ少ないものの、大者研究者が無名の頃に自費出版した研究ファイルやら、今では賢者と呼ばれるような大御所の書き付けたノートの原本がおいてあったりする珍妙な店だ。

開店前のその店の看板前に、一目で武装機関員とわかるような馬鹿にごつい単車が止まっていて、その単車にまたがった男が手持ち無沙汰に煙草をふかしている。

件の相棒——ノイ・ジャーハ・ルツ・ピーコックだ。

短い黒髪に浅黒い肌、鮮やかな光彩をはなつエメラルドの瞳、精悍に整った顔立ち。

気だるそうな目付きが妙に絵になる奴だなあと変なことに感心していると、男がスキピオを一度、流し目に見やつてから車体に煙草を押しつけ揉み消した。

「——よお。おはよ、スキップ」

ニヤリと口角を上げる笑い方をみると、どうやらここに着いてからさほど待たなかったらしい。上機嫌に声をかけてきた相棒のお咎めなしの様子にほっとしながら、スキピオは男のもとに駆け寄った。

「はよ。待たした？」

「別に。お前が朝弱いなんていつものことだしね。そんなことより早く乗りなよ」

「ん、さんきゅー」

サイドカーを顎で示したノイに頷いて、スキピオはほとんど自分専用になっている相棒の単車のサイドカーに乗り込んだ。

明らかに高級とわかるふかふかの座席について、正面に備え付けられた映像端末に手早く自分の仕事用ICチップを接続する。

『接続状態良好。声紋を確認します』

「No, 992。スキピオ・マーザグース」

『——読み込みを完了しました。新着情報を表示します』

「うわ、すごいメールたまってたけど。昨日何かあったのか」

座席のなかからいつもの通りにヘルメットを引っ張りだして被ると、それを確認したノイが空腹に響く低音で、単車のエンジンをふかした。

「お前が休んでる間に、第二居住エリアの隔壁が壊れて、魔物が入り込んだんだよ。二人重傷」

「エージェント？民間人？」

「民間人。命に別状はないらしいけどね」

「なる、大事だなそりゃ。そんじゃ、今日は各エリアの見回りから行くかんじ？」

「俺らにそんな楽な仕事、回ってくると思ってる？」

「えー隔壁の補修とかしんどいー」

「補修は昨日のうちに工兵がやったらいいね。俺らは残党狩りの方」
「ならいいけど。てか腹減ったー…」

へにやつと座席に持たれて、きゅうきゅう情けない音をたてる腹を押さえて愚痴ると、前を向いたままのノイが

「座席の下のホットドッグ、ひとつお前のだから」

と、そっけない調子で言った。

思わず目を輝かせて座席の下を漁ると、ほどなくガサツと乾いた紙袋の感触に行き当たる。

二人が鼻屑にしている駅前の露店の紙袋を引っぱりだし、中身を覗いたスキピオは大袈裟に歓声をあげた。

「わ、やった。俺これ好き！」

「知ってる。マスタート多い方は、」

「ノイの、な。わかってるって」

そう、とスキピオに気のない返事をしてから、ノイはアクセルを踏んだ。

緩やかに発進した単車に身を任せて、封を開けたホットドッグにかぶりつく。

マスタートたつぷりのがノイの。ピクルス少なめのが俺の。

いつも通りながらちゃんと自分好みに注文されていたホットドッグに思わずニヤツとして、それからスキピオはノイの横顔を眺めた。相棒で、友達。そんでもってたまにスキピオは、兄貴がいたらこんな感じかな、と考える。

「何、その顔。不細工」

「べえつつにー」

「……まあいいけど。このまま現場に行くよ」

「りよーふあい」

出勤がてらの朝食にかぶりつきながら、スキピオはひらひらと片手をふって返事をした。

「———そういえば、今日の魔力の調子はどうなわけ？スキピオ」
「んん、調子？すつごい良いぞ。もういっぱいいいっぱいで吐きそうってかんじ。早く上級魔術で消費しないと、スキップ太っちゃう」
不意に尋ねられて、冗談混じりに返すと相棒はニヒルな笑みを浮かべたと思うと、くつと眉を寄せてしまう。

少し機嫌を損ねたな、と頭の片隅で考えてからスキピオは租借していたソーセージを飲み下した。この場合、冗談が面白くなかったと言っよりもスキピオが自分の体調不良を冗談めかしたことが氣になかったのだろう。

真面目な話、生まれながらに体内魔力の量が他人のウン十倍あるスキピオは、魔力の調子がいい日ほど、体調は悪い。

太るってのはさすがに比喩だが、感覚としてはあながち間違いでもないだろう。体内に必要以上に蓄積してしまった魔力のせいで、本来循環すべき魔力が上手く体内を巡らなくなってしまうのだ。

「…そう、手早く仕事が終わりそうでは有り。——研究所でのメンテはいつ？」

「今日辺り、仕事終わったら行くよ。父さんの顔見に行くついで」

そのため、スキピオは隔週で魔力研究機関で検診を受けている。

父親が所長をやっているところなのでついでに顔をみせに行くのだが、あまり長く話せたことはない。研究所での父は、息子の検診ということもあつて気合いが入っているのか、なにせ仕事モード全開なのだ。

待ち時間はめちゃくちゃ長いし——といつてもまあ、暇を潰すアテはあるのだが——なんだか実験体にでもなつたみたいに事細かく調べられるので、実のところメンテはあんまり好きじゃないのだけれど。

「なら、帰りも乗ってけば」

「送ってくれるの？」

「お前、すぐメンテサボるからね」

「…信用ないなあ」

「馬鹿だね。そういうことじゃないよ」

「じゃあツンデレ過保護」

「…お前ね、どこでそういうの覚えてくるの」

「口うるさい兄ちゃんには教えませーん」

お互い適当に話をそらしていつもの調子に切り替え、とりとめのない話をしながら再び携帯端末をいじる。

「…あ。今日の仕事のメール見たい」

「フォルダの上から二番目」

「ん」

投げて寄越されたノイの端末を受け取って、ディスプレイとの接続を切り替える。

スキピオは私用も仕事の携帯も一緒だが、ノイはきっちり分けて使っている。プライバシーを気にすることもないわけで、勝手知ったる調子でスキピオはノイの端末情報を読み込んだ。

「うえ！？今日の仕事って外じゃん！もっと準備してくるんだった…」

外——つまり、市街地を囲う防御隔壁外。

防御隔壁という言葉からわかるように、壁の外側は安全な場所ではない。

有り体に言えば街は人の領域で、外側は魔物の領域である。

魔力汚染の濃度にもよるが、旧文明の遺跡の上に魔物の巣が点在していて、ほとんどの土地は荒廃している。

魔力が濃すぎる場所で魔力を持たない動植物は生きていけないのだ。

魔物と戦うすべのない一般市民が外の行き来するにはそれ自体が移動する隔壁都市として機能している”ベデウィック惑星鉄道”に乗

るか、専門のキャラバンを使うか、そうでなければスキピオたちのようなミリタリーサービスに頼るかしなければならぬ。隔壁外には”前線”と呼ばれるミリタリーサービスの軍事施設が存在するので、機関員は自然、外と中とを行き来するのだ。

「市街地近辺に彷徨してる残党狩りが今日の仕事。俺たちが手こずるほどのエリアじゃないよ、前線ともそう離れちゃいない」

「つつてもさあ…外だとイレギュラーな戦闘多いじゃん。しかも今日の装備、充填式魔弾装狙撃ライフル、同型ショットガン一丁と簡易召喚用のエッジナイフ。防具はコートだけ。以上」

「召喚器具があれば死にやしないんじゃない？」

「……ゲート出る前に、弾だけ込めさせてね」
「好きにしろ」

そっけない相棒の返答に気を悪くすることもなく頷いて、スキピオは座席の後ろに立て掛けていたガン・ケースを引っ張り出した。

収納された部品をひとつひとつ確認しながら、慣れた手つきでライフルとショットガンをそれぞれ組み立て始める。

充填式魔装弾ライフル、同型ショットガン——名前のまま、魔力を充填することによって強化した弾を使用する銃だ。

既に魔力を充填された既製品の銃弾を買うのが一般的だが、スキピオは魔力発散のために自分で魔弾を充填している。

「もう術式は込めてあるの」

「当たり前だろ、今から練ったんじゃ時間ないって」
「だろうね」

ショットガンに至っては後方戦闘に長けるスキピオの魔術の発動媒体でもあり、魔力のみでなく魔術の術式自体が弾に練り込んでいる

逸品だ。

それぞれに弾を込めて、セーフティを確認したあたりで単車が丁度ゲートの手前に差し掛かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4992t/>

なりそこないのジャバウォック

2011年10月8日22時00分発行